



あだっこ

五條市立阿太小学校だより
平成30年1月17日
第29号

あかるく元気な子 だれにも親切な子 しっかり考える子 ことばを大切にする子



生きるということ



○1995年1月17日午前5時46分、6,000人以上の方がなくなり、40,000人以上の方が負傷したあの阪神・淡路大震災から23年が過ぎました。

年を経るごとにそんな出来事も遠い昔のように忘れ去られていくのでしょうか。犠牲になられた方々の、「もっと生きたかったぞ!」という思いもどんどん遠ざかっていくような気がします。

○十年前の1月17日、朝日新聞夕刊にこんな児童の作文が掲載されていたのを思い出しました。一部抜粋して紹介します。

命



生きていることと死んでしまうこと。“命”について、わたしは考えたことがなかった。だけど、1月17日の大震災。すみれや、縦割りペアの米津君。お兄ちゃんの友達の家族や、ミニバスの先輩。わたしのよく知っている人たち十数人が死んでしまった。“人の死”は、初めて私のそばにやってきたんだ。

“命”は弱いと思う。『人の命は地球と同じ』なんて絶対うそだ。約五千人の“命”がたった20秒で次々となくなってしまうなんて、信じられなかった。人の“命”は、そんなにもろいものなのだろうか。

でも、いろんなニュースを見ているうちに、弱いだけの“命”ではないのかもしれない、と思うようになった。くずれた建物から助けられた人々。重い重いコンクリートや木材の中を生きぬいた“命”。すごく強いと思う。

では、生きている私と死んだすみれは何がちがうのだろう。

まず私。ご飯食べて、寝たり起きたりしてる。学校行ってみんなと話して笑ったり怒ったり泣いたりしてる。

すみれ。冷たい石の中で、姿を変えている。全然動かない。

私とすみれは、全く正反対になってしまった。

今回の震災で、生きていることがすごくいいことだと考え直させられた。死ぬと、なにもできなくなってしまうけど、生きている限り、夢や可能性は無限だ。たった一度の人生だから、みんなみんな死ぬまでに、たくさん思い出を残そうとして、必死で生きているんだ。

生きていること。それは、困難のかべにぶつかりそれを乗り越えること。約束された死までの時間を輝くものにすること。

たった一つしかない命だからこそ、自分の命も他人の命も大切にして、毎日を一生懸命生きたいと思います。23年前の出来事を思い出しながら、家庭でも命の大切さについて語り合っただけであれば幸いです。

